『ファウスト』雑感 X
－戦争－

Notizen über „Faust“ X
－Krieg－

漆　谷　克　秀
Katsuhide Urushidani

10. 戦争　(Krieg)

2022 年 2 月 24 日に、ロシアはウクライナに侵撃した。一ヶ月前である。明らかにウクライナの領土と主権を侵害する戦争だ。数日の内に首都キエフを陥落させ、傀儡政権を樹立する予定だったようだ。内応する者もいて、その準備はできていたのであろう。しかし、ウクライナの抵抗は予想以上に強く、キエフ付近で前進が止められている。戦況を、廃墟と化した町の情景を、同じ時間を共有するかのように毎日、テレビでわれわれも見ている。爆弾やミサイルが炸裂し、炎が上がり、煙が覆うところにも、見えないのだが、人間がいるのであろう。その廃墟の下で、涙を流しながら、懸命に生活している人がいるのだ。両国の間には、大きな軋轢を生んだ歴史上の出来事があったことも知っている。しかし、ウクライナ人とロシア人、民族的に区別されても、わたしにはそれが判らない。強欲な老人が正義を旗印にして仕掛けた戦争であり、次の時代を担う多くの若者が死んでいく。そう思うと、やりきれなくなる。

民間人を攻撃していない、などと嘘とわかる嘘を国連の場や、ロシア国民を前にして強調する政治家もテレビに映し出される。真実、そのように思っているのか疑いもするが、政治家はときに平気で嘘をつけるのが必須の条件なのであろう。『うその言語学』(大修館) では「 真実を隠すことができる 」つまり「 うそをつく 」ことが、「 人間 」を規定する要件としている。それの長けた言語もあるらしい。外交のため言語であり、国連の公用語などその最たるものであろう。著者のヴァインリヒはたしか、ドイツ語は「 真実 」を伝える言語であり、外交のための言語にはむかない、と論述していたと記憶する。日本語はどうなのであろう。日本の政治家にも、平気でうそをつく方々が居る。

あれだけの破壊を目にして、正義の戦争などあるのか、また、現代の戦争に、果たして勝利があるのか、とさえ思う。ロシアの大統領は核兵器の使用を示唆する。それを使うと、どのような惨状が現出するのか知っているであろう。核抑止力など、もう幻想にすぎない。核兵器は、攻撃するための通常の兵器になったのである。「 核拡散防止 」など、もう大国のエゴにすぎない。世界の核兵器の実態をどこまで理解しているのかわからないが、遠く離れた日本であっても、その恐怖に曝されていることになる。軍事基地の密集する沖縄など、第一の攻撃目標であろう。ただ、早く終わってくれることを祈るばかりだ。

『ファウスト』に次のような場面がある。復活祭で市民が街に繰り出すなかでの、二人の市民の会話である。

ANDRER BÜRGER.

Nichts Bessers weiß ich mir an Sonn- und Feiertagen
Als ein Gespräch von Krieg und Kriegsgeschrei,
Wenn hinten, weit, in der Türkei,

Die Völker auf einander schlagen.
Man steht am Fenster, trinkt sein Gläschen aus
Und sieht den Fluß hinab die bunten Schiffe gleiten;
Dann kehrt man abends froh nach Haus,
Und segnet Fried' und Friedenszeiten.

DRITTER BÜRGER.

Herr Nachbar, ja! so laß ich's auch geschehn,
Sie mögen sich die Köpfe spalten,
Mag alles durch einander gehn;
Doch nur zu Hause bleib's beim alten. (860-71, S.34)

もう一人の市民.

日曜日や祝日に、戦争のことや戦争の噂などで
語り合うことほど楽しいものはありませんな。
それが、遠く離れたトルコあたりで、
民族同士が互いにドンパチしているのだったら。
窓辺にいて、グラスを飲み干し、
色とりどりの船が水を切って行くのを見ながら。
夕方になれば楽しい気分で家に帰っていく、
そして平和と平和な時間のことで神をたたえるのです。

三番目の市民.

そうだよな、お隣のお方！　わたしもそうしますよ、
彼の地の人々が互いに頭をぶち割っていればいい、
なにもかもがめちゃくちゃになればいいのだ。
でもわが家だけはそっとしてもらいたい。

この市民の会話から、トルコのあたりで紛争が起こっているらしいことがわかる。ファウストが生きていた時代、15 世紀後半から、16 世紀にかけて、オスマン・トルコは、ビザンチン帝国を滅ぼし、バルカン半島を版図に加えて、ヨーロッパ、アフリカ、アジアにまたがる大帝国を造る勃興の時代である。ゲーテの時代なら、バルカン半島や黒海沿岸をめぐって、ロシア帝国との間で衝突が起こり、オスマン・トルコは、幾度も戦火を交えている。おそらくこの露土戦争が念頭にあるのだろう。戦場から遠く離れて、戦禍に巻き込まれる心配もないところで、昔ながらのありふれた日常を過ごす市民にとっては、遠いよその国から伝え聞えてくる戦況などを話題にしておしゃべりをするのが楽しみなのであろう。戦場が、いかに凄惨な情況にあったとしても、他人事なら酒でも飲んでそのことを楽しく語り合うこともできるのである。そして、平穏な一日を神に感謝するのだ。

この『ファウスト』で、戦争の場は第二部の第四幕「高山」(HOCHGEBIRG) にある。そのほかにも戦争が想起される場面がある。第三幕の初めで、その運命を戦争に翻弄され、ただ休息を願うヘレナを、スパルタ王メネラス (Menelas) は略奪しようとする。迫り来るスパルタ軍に対して、ファウストはゲルマン民族の将たちに号令を掛ける。戦闘の場はないが、勝利したのであろう。同じ三幕の終わりで、自由を求め、「戦争だ！　勝利だ！」と言って戦場に赴き、ヘレナとファウストの子オイフォリオンは死ぬ。戦闘は高みへと上ることで、死は墜落で暗示されている。

ファウストは、死んだオイフォリオンとともに黄泉の国へ行こうとするヘレナを抱きしめ、繋ぎ止めようとして離しはしなかった。しかし、ヘレナは消えていき、しっかりと掴んでいた衣服だけが手元に残った。それが雲となって、ファウストを空の彼方へ、高みへと運んでいくのである。

第四幕で、その雲は、鋭く尖った岩の頂に達し、突き出た平らな部分に降りてきて割れる。そして、ファウストが登場する。ドイツに戻ってきたようだ。雲はさらに形を変えながら、漂い去っていくのだが、変形する雲に、ファウストは、ユノーやレダ、ヘレナというギリシャの女神たちを認める。そして、身の回りに柔らかな霧がたなびいてきて、ためらいがちに高く、高く上っていき、つながりあって形を作る。それにファウストは若き頃の大切な人の形象を見るのである。

・・・・・・

Des tiefsten Herzens frühste Schätze quellen auf:
Aurorens Liebe, leichten Schwung bezeichnet's mir,
Den schnellempfundnen, ersten, kaum verstandnen Blick,
Der, festgehalten, überglänzte jeden Schatz,
Wie Seelenschönheit steigert sich die holde Form,
Löst sich nicht auf, erhebt sich in den Äther hin
Und zieht das Beste meines Innern mit sich fort.　　(10060-66, S.304)

・・・・・・

心の奥底にある若い頃の宝物がわきあがってくる。
アウロラの恋のように、軽やかな躍動だとおれにはいえる。
素早く感じた最初のほとんど理解もできなかった眼差しを、
その眼差しは、固く留めておければ、あらゆる宝物を明るく照らしたのに。
魂が美しいように、優美な形姿が高まって、
とけることもなく、エーテルのなかへと立ち上っていく
そしておれの内奥の最高のものを引き連れていく。

ファウストの美しい独白である。まるで最終場の「救済」が予感されるような雰囲気が漂う。ファウストの周りに霧となってたなびき、やがて雲となってファストを高みへと上げていこうとするその雲に、ファウストは「若い頃の宝物」を見て、初恋の躍動を感じ、それにグレートヒェンの形象を見ているのは明らかであろう。しかし、今までの甘ったるい独白とは違い、上っていく雲に、うちに秘めた志と決意をファウストは見ているようだ。

そして、メフィストフェレスが「魔法の長靴」(Siebenmeilstiefel) をはいて、この岩山によたよたと上ってくる。二人は、山の頂からその景観を眺めながら、「自然」についてやりとりをする。メフィストフェレスによれば、大地の生成は、最も深い地獄の奥底で行われ、すべて悪魔の仕業であるらしい。

メフィストフェレスは、ファウストを「小世界」の遍歴(グレートヒェンを巡る悲劇)に、「大世界」の遍歴(ヘレナを巡る悲劇)にと連れ出して、もう幾年月、ファウストに仕えてきたことか。しかし、ファウストはまだ、賭けを交わしたときの約束の言葉を発してはいない。メフィストフェレスにとっては想定外のことであったであろう。このままでは賭に負けてしまう。そのようなことがあってはならない。ファウストが抱いている願望を見出すべく、いろいろと探りを入れ、本心を聞き出そうとする。

MEPHISTOPHELES.　Errät mal wohl, wornach du strebtest?
　Es war gewiß erhaben kühn.
　Der du dem Mond um so viel näher schwebtest,
　Dich zog wohl deine Sucht dahin?
FAUST.　Mit nichten! dieser Erdenkreis
　Gewährt noch Raum zu großen Taten.
　Erstaunenwürdiges soll geraten,
　Ich fühle Kraft zu kühnem Fleiß.
MEPH.　Und also willst du Ruhm verdienen?
　Man merkt's, du kommst von Heroinen.
FAUST.　Herrschaft gewinn' ich, Eigentum!
　Die Tat ist alles, nichts der Ruhm.　(10177-10188, S.307-8)

メフィストフェレス.　あなたが何を求めていたか、当ててみましょうか。
　それは確かに極端なまでに崇高なものでした。
　月のすぐ近くまで行ったあなただから、
　あなたの欲求はそちらのほうに引きつけられているのでは？
ファウスト.　そんなことはない！　この地上に
　まだ偉大な行為をなすべき余地が認められる。
　驚くべきことがうまくなされそうだ、

おれは、思い切ってそれに励む力を感じている。
メフィスト.　　それでまた、名声を手に入れようと思っているのでしょう？
知っての通り、あなたはあの女傑たちのところから戻ったのですから。
ファウスト.　　かちとるのは支配だ、そして、自分のものにする！
行為こそすべてだ、名声などつまらない。

ファウストはヘレナを求めて冥界にまで下っていったことはあるが、月の近くまで漂っていったことがあるのであろうか。ドイツからギリシャへ、ギリシャからドイツへと飛行を重ねてはいる。「小世界」,「大世界」への遍歴が終わった後、のこるは「上」を目指すことなのか。それはメフィストにとって厄介のことになる。「地獄」ならまだしも、「天上」の世界など、メフィストフェレスにとっては窺い知れぬ世界であり、ファウストを「天上」に連れて行き、案内するわけにもいかない。メフィストの不安が覗けるような台詞かもしれない。

しかし、行為の人ファウストの返事は違っていた。この「地上」になすべき仕事があるという。それは「支配」(Herrschaft) であり、「自分のものにすること」(Eigentum) である。その具体的な対象が「海」であった。ファウストの「海」に向けられた眼は、この大地に襲いかかってくる「波」にその「不毛性」(Unfruchtbarkeit) を見る。

FAUST, leidenschaftlich fortfahrend.

Sie schleicht heran, an abertausend Enden,
Unfruchtbar selbst, Unfruchtbarkeit zu spenden;
Nun schwillt's und wächst und rollt und überzieht
Der wüsten Strecke widerlich Gebiet.
Da herrschet Well' auf Welle kraftbegeistet,
Zieht sich zurück, und es ist nichts geleistet,
Was zur Verzweiflung mich beängstigen könnte!
Zwecklose Kraft unbändiger Elemente!
Da wagt mein Geist, sich selbst zu überfliegen;
Hier möcht' ich kämpfen, dies möcht' ich besiegen.
・・・・・・
Da faßt' ich schnell im Geiste Plan auf Plan:
Erlange dir das köstliche Genießen,
Das herrische Meer vom Ufer auszuschließen,
Der feuchten Breith Grenzen zu verengen.
Und, weit hinein, sie in sich selbst zu drängen.
Von Schritt zu Schritt wußt' ich mir's zu erörtern;

Das ist mein Wunsch, den wage zu befördern!　(10212-221, 10227-233, S.308-9)

ファウスト　(情熱的に続ける).
不毛そのものの波がこちらへと忍び寄る、
幾千もの地のはてに不毛性を施すために。
膨れ上がり、大きくなって押し寄せ
荒れ果てた海浜の不快な一帯におおいかぶさる。
波また波と、力を見せつけるように支配し、
引き下がっていく、そして何一つ成就したものはない、
それがおれを不安にさせ、絶望させるのだ。
手に負えない自然の目的のない力だ！
だからこそおれの精神は、自身を越えていこうとあえて命を賭ける。
この場でおれは戦いたい、この海に勝ちたいのだ。
・・・・・・
それでおれはすぐに頭の中で計画を練り重ねた。
この壮大な海を岸からしめ出し、
湿った広大な海の境界をせばめ、
そして遙か向こうへと、海の領分を追いやる、
このかけがえのない貴重なことを享受せよと。
一歩一歩、おれはそれを考え抜いてきた。
これがおれの願いだ、それをできるよう促し，助けてくれ。

ファウストの願望は、まだこの地上とつながっていた。それは、時として荒波に狂う「海」を堰き止めて、干拓し、広大な土地を造り、理想とする国土を築くことであった。「自然」に人智をもって、己の「精神」をしめすことでもあった。ファウストにここで示される「海」は、第二幕の「古典的ワルプルギスの夜」で示された南の「海」とは違っている。北の「海」なのであろうか。

干拓地として有名なのは、オランダであろう。インターネットで検索してみると、干拓事業とはいえないが、『ガリア戦記』に、土を盛って地面を高くし、魚を捕って人々が住んでいた、という記述があり、ローマ時代に最初の堤防が造られたとか。13 世紀初頭から、本格的な干拓事業が始まって、三圃制の普及など農業生産力が向上し、西ヨーロッパ中世社会の変容の一環としてとらえられている。16 世紀には海洋国家として、資本主義経済の枠組を整えながら、世界を牽引していった。ゲーテはそのような国家を念頭においていたのであろうか。ゲーテが生きた 18 世紀後半から 19 世紀前半は、欧米諸国の科学技術の進展は著しく、それに明るい未来を見た人々も多くいたであろう。しかし既に、イギリスでは経済活動による公害が問題になっていたし、人口の都市集中による環境の劣化の問題が提起されて

もいた。「自然」に挑もうとするファウストのこのあまりにも強い「精神」に、ゲーテは危うさも暗に示しているようだ。

ちょうどこの時、第一幕のカーニバルの仮装舞踏会ではしゃいでいた例の皇帝は、反乱軍に苦戦していた。メフィストフェレスの甘言にたぶらかされ、国家財政の破綻を「見せかけの富」(falschen Reichtum) (10245, S.309) である兌換紙幣発行で切り抜けたのだが、このことからこの皇帝は何も学ぶことはなかった。金で世界が意のままにできると思い込み、「統治すること」(regieren) と「楽しむこと」(genießen) が両立すると考えていたらしい。メフィストフェレスの報告では、この皇帝はそれを実践したのである。信念を曲げなかったことはよいのであるが、国内がどのような状態に陥るかは判断できよう。国は無政府状態 (Anarchie) になって、「生きることは自己を守ること」(leben hieß sich wehren) で他人を殺さねば自己も生きていけず、至る所で殺し合いが起きていた。新しい生命を吹き込んでくれる皇帝を選び出し、その皇帝のもとで、各人の安全を確保し、平和と正義を確立しようとする反乱が起こり、広がっていった。先の皇帝は、山中の狭い谷間に退却し、態勢を整えて、最後の戦いに挑もうとしていた。この敗色濃厚な皇帝をこの谷間から救い出そうとメフィストフェレスはいうのである。「さあ、見に行きましょう！　生きている限り希望を持たないと！ / 皇帝をこの狭い谷間から救い出すのです！」(Komm, sehen wir zu! der Lebende soll hoffen! / Befrein wir ihn aus diesem engen Tale!)(10292-3, S.311) これが悪魔のいうことなのか。生きている限り希望を持て、というのだ。到底悪魔の言葉とは思えない。希望も抱けず現在を生きている人、希望があっても現実との齟齬、乖離にくどくどと愚痴を並べるだけの人、そのような人間こそ、悪魔には好ましいのではないのか。メフィストは、皇帝を助けるという行為 (Tat) を提起する。それには目的があるからだろう。だが、メフィストの持つこの明るさはなんなのだ。二度の試みに挫折した今、メフィストにも新たに希望が持てたようだ。

「まやかしか！　魔術のたぶらかしか！　中身のない見せかけか」(Trug! Zauberblendwerk ! Hohler Schein.) (10300, S.311) と茶化すファウストに、メフィストフェレスは次のように言う。

MEPHISTOPHELES. Kriegslist, um Schlachten zu gewinnen!
Befestige dich bei großen Sinnen,
Indem du deinen Zweck bedenkst.
Erhalten wir dem Kaiser Thron und Lande,
So kniest du nieder und empfängst
Die Lehn von grenzenlosem Strande.
FAUST. Schon manches hast du durchgemacht,
Nun, so gewinn auch eine Schlacht!
MEPHISTOPHELES. Nein, du gewinnst sie! Diesmal
Bist du Obergeneral. (10301-310, S.311)

メフィストフェレス.　戦いに勝つための戦略というもので！
　あなたも自身の目的をよくよく考えて、
　大きく気持ちをしっかりと固めてください。
　我々は皇帝のために王座と国土を守ってあげましょう、
　そうしてあなたは皇帝の前に跪き、頂戴するのです、
　果てしない海岸を封土として。
ファウスト.　今までいろいろなことをおまえはやってのけてきた、
　さあ、もうひとつ戦いに勝ってくれ！
メフィストフェレス.　いいえ、あなたがそれに勝つのです！　今回は
　あなたが最高司令官です。

戦術も戦略も知らないファウストは驚くが、メフィストフェレスは既に段取りをつけており、戦いは参謀本部 (Generalstab) の連中に任せればよいというのである。そして、年齢の違った三人の暴れ者 (Die drei Gewaltigen) を呼び出す。一人は、若くて軽武装で、派手な衣服を着けている「けんか男」(Raufebold) で、目を合わせただけで一発食らわせるような奴である。「暴力」のアレゴリーで、目立たなければならない。二人目は、壮年のほどよく武装し、豪華な衣装を纏っている「かっぱらい男」(Habebald) で、なによりも取り込むことに専念し、他のことは後回しにする奴である。「収奪」のアレゴリーである。三人目は、高齢で十分に武装しており、盛装はしていない「かたにぎり男」(Haltefest) で、奪うのはよいことだが、手放さずに持ち続けることこそもっと良いことだという「保持」のアレゴリーで、奪い返されないように、しっかりと武装し、あまり目立ってはならない。この三人は連れだって谷へと下りていく。この三人が参謀ということなら、メフィストフェレスは参謀長というところか。どのような戦いになるのか、想像がつくであろう。

ゲーテは 1775 年 11 月にヴァイマル公カール・アウグスト公 (Karl August) の招きで、ヴァイマルに赴いた。翌年の 6 月に公国の最高機関である枢密顧問会議を構成する三人の大臣の一人に任じられた。彼の携わった政治、行政案件は、イルメナウ銀銅鉱山の再建、土地改良による農業振興、道路整備、軍隊の削減（おおよそ半減）と、財政再建策の推進、など。外交においても、オーストリアとプロイセンの対立のなか、領邦国家としての自主性の確立など、ゲーテも政治家としての手腕を発揮しようとはしたが、現実の諸条件を克服できず、ほとんどが挫折した。ゲーテは、「戦争」をこの三人の暴れ者によってアレゴリー化された、そのような意味において捉えていたのであろう。つまり、「戦争」の様態は「暴力」の行使であり、それによって他者のものを「収奪」し、取り上げたものをできる限り「保持」することである。当時は、戦争に勝利すれば、領土の獲得になり、賠償金などで内政も潤い、儲かる商売でもあった。宗教改革以降、17 ～ 19 世紀は、植民地の獲得という対外膨張政策の時代でもあり、ヨーロッパの近代国家は戦争とともにあったともいえる。(『ヨーロッパとは

何か、分裂と統合の 1500 年』クシシトフ・ポミアン、平凡社、139 ページ以下）ゲーテも、カール・アウグスト公のもとで、プロイセン軍に与して軍務につくこともあった。果たして役に立ったであろうか。

次の場は、「前山の上」(AUF DEM VORGEBIRG) で、そこには皇帝の陣営があり、皇帝は「上級将軍」(Obergeneral) や敵にもぐり込ませた「スパイ」(Kundschafter) から、戦況などの報告を受けている。この危機に臨んで、この皇帝は自らの面目を守ろうと、「対立皇帝」(Gegenkaiser) に戦いを挑もうとしている。そこに甲冑をつけたファウストが、メフィストやその手下である先の三人の参謀を連れ、さらに「酒保の女」である「ぶんどり女」も加わって、皇帝に拝謁する。酒保の「ぶんどり女」は次のようにいう。

EILEBEUTE, Marketenderin, sich an ihn anschmiegend.
Bin ich auch ihm nicht angeweibt,
Er mir der liebste Buhle bleibt,
Für uns ist solch ein Herbst gereift!
Die Frau ist grimmig, wenn sie greift,
Ist ohne Schonung, wenn sie raubt;
Im Sieg voran! und alles ist erlaubt. Beide ab. (10531-35, S.317-8)

ぶんどり女. （酒保の女商人、かっぱらい男に躰をすり寄せる）.
わたし、この人の女房というわけじゃないの、
でも、この人、わたしには一番いい人なの、
わたしたちには実りの秋ってもの！
女はね、手を出すときには恐ろしいんだから、
奪うときには手加減なしよ！
勝利の時には、真っ先に！　何をしたっていいんだから。（両人退場）

「ぶんどり女」は「かっぱらい男」のオンナらしい。素質、素行も似通っており、気性が合うのであろう。相当な強欲女だ。気がかりなのは、勝利すればなにをしてもよい、と言っていることである。そのことは、現代の戦争でもそれほど違うことはない。1980 年に制作されたドイツ映画『ドイツ　青ざめた母』で、廃墟と化した工場跡で、二人のアメリカ兵から母親のヘレーネが、子供の目の前で、レイプされるシーンがあった。事後、泣き続ける子供に母親はなにもなかったかのように「女も戦利品なの」というようなことを言っていた。先の大戦で、一万数千人戦死者を出して収奪した「沖縄」は、アメリカにとって戦利品なのであろう。なにをしてもかまわないという意識がアメリカにあったのは否めない。普天間飛行場も果たして戻ってくるのか、とさえ思っている。最初の返還予定から 20 年以上すぎている。これからも相当なプレミアムが要求され、数十年後に返還されればよいのか。

また、ファウスト（あるいはメフィスト）の戦陣に女性がいるということである。兵隊を相手に商いをしており、春をひさぐこともあろう。50年以上前のことであるが、テレビで確か『モロッコ』とかいう映画を見た。あらすじも覚えていないが、最後の場面だけ覚えている。砂漠のなかを行進していく傭兵部隊の後を、大きな荷物を背負った女たちが幾人も追っていく。それを見たヒロインが、ハイヒールを脱いで手に持ち、その部隊を追っていくところで終わる。ツェランの詩に関連してのことだが、古代ギリシャのクセノフォンの記録文学『アナバシス』を読んだ。古代ペルシャの内戦に参戦したギリシャ傭兵部隊の撤退記録である。指揮官を失った一万人にものぼる傭兵のギリシャ軍を、クセノフォンはまとめ上げてギリシャに退去するのだが、そのギリシャ重装兵部隊も女性や子供を連れていた。女性や子供を守るように円陣を組み、撤退していく記述もあった。戦陣にいるのは男ばかりではない、また兵隊ばかりがいるということでもなく、日常の生活もそこにあるのであろう。

さて、先の戦争の場はどのようになっていったのか。偵察にいった兵やファウストもメフィストも、皇帝に戦況を逐一報告している。そのような報告をする形で戦争がどのように進展しているのかを表す。多くの兵隊を連れてきたメフィストフェレスは、観客を想定している「訳知り人々」に言う。

MEPHISTOPHELES.　・・・・・・

Leise zu den Wissenden.

Woher das kommt, müßt ihr nicht fragen.
Ich habe freilich nicht gesäumt,
Die Waffensäle ringsum ausgeräumt;
Da standen sie zu Fuß, zu Pferde,
Als wären sie noch Herrn der Erde;
Sonst waren's Ritter, König, Kaiser,
Jetzt sind es nichts als leere Schneckenhäuser;
Gar manch Gespenst hat sich darein geputzt,
Das Mittelalter lebhaft aufgestutzt.
Welch Teufelchen auch drinne steckt,
Für diesmal macht es doch Effekt.　(10554-564, S.318)

メフィストフェレス.　・・・・・・

（訳知りの観客にむかって）

あれがどこから来たのかなんて、あんたら、尋ねないよ。
もちろんわたしも、躊躇はしなかった。
そこいらあたりの武器庫も空っぽになってね。
武器庫で奴らは、徒歩で立っていたり、騎乗していたりで、

まるで地上の主であるかのようでした。
以前は奴らも騎士であり、王であり、皇帝だったんだ。
今では、空っぽのカタツムリの抜け殻さ。
まったく多くの化けものたちが、その中に入ってめかしこみ、
中世をさながら生き生きと甦らせましてね。
なんと小悪魔もその中にもぐり込んでおり、
今回は効果もあるようです。

まるで甲冑を身につけたゾンビ軍団のようである。しかし、意気盛んで威勢だけはよいようである。どのような戦闘が展開されたかは、メフィストフェレスが皇帝に逐一報告しているので、各自お読みください。どうせまやかしの戦術だろうと思われるかたは、飛ばしてくださってもよろしいか、と。皇帝軍の勝利を確信しかけたときに、皇帝はファウストに、軍事的に要衝である岩山の陣地が大挙して押し寄せる敵に攻略されかかっていることを示し、「お前たちの術もむなしかった」(Eure Künste sind vergebens)(10663, S.321) という。メフィストフェレスのやることなにもかも、皇帝は気に入らない。だが、ここからがメフィストフェレスの本領を発揮する場となる。従者の二羽のカラスを使いとして、大きな山の湖のところにいる水の精ウンディーネたちのところに差し向ける。彼女たちに、まやかしの大洪水を岩山のあたりから起こしてもらうように頼むのである。この伝令たちは有能で、すぐさま岩山からまぼろしの水が流れ始め、小川になって合流し、泡立ちながら大水になって谷に流れ込む。もう敵の勝利はなくなった、とファウストは眼前の様子を報告する。しかし、メフィストフェレスにはまやかしの現象が見えない。人間の眼だけが、見せかけにだまされる、という。水もないのに、溺れそうになっている人間を見て、楽しんでいるのだ。なんという皮肉か。それにしても、実体がみえずに、まやかしに眼が眩む人間も多い。まやかしの中で苦しんでいるのに、悪魔には実相が見えている。なんということだ、恐ろしい言い草である。メフィストフェレスの眼が人間にも必要なこともあろう。

さらに、帰ってきた二羽のカラスに、侏儒の鍛冶場に行って火花をもらってくるように命令する。退散する敵を脅かして錯乱させるためのようである。

次の場は、撤退して誰もいない「対立皇帝の天幕」(DES GEGENKAISERS ZELT) で、そこに「かっぱらい男」と「ぶんどり女」が早速駆けつけている。王座の周りには宝物が多く散らばっている。強欲な二人は、金目のものをなるべく多く奪おうとするが、物品は運びづらくガラクタということになって、結局兵士たちへの給金の金貨が入った箱を持ち去ろうとする。しかし、重すぎて落とし、散らばってしまう。それをかき集めているときに味方の親衛兵たちが入ってくる。

TRABANTEN　unsers Kaisers.
Was schafft ihr hier am heiligen Platz?

Was kramt ihr in dem Kaiserschatz?
HABEBALD. Wir trugen unsre Glieder feil
Und holen unser Beuteteil.
In Feindeszelten ist's der Brauch,
Und wir, Soldaten sind wir auch.
TRABANTEN. Das passet nicht in unsern Kreis:
Zugleich Soldat und Diebsgeschmeiß;
Und wer sich unserm Kaiser naht,
Der sei ein redlicher Soldat.
HABEBALD. Die Redlichkeit, die kennt man schon,
Sie heißet: Kontribution.
Ihr alle seid auf gleichem Fuß:
Gib her! das ist der Handwerksgruß. (10817-30, S.326)

親衛兵たち （我々の皇帝の）.
おまえたち、この神聖な場所でなにをしているのだ？
おまえたち、皇帝の宝をなぜかき回している？
かっぱらい男. おれたち、自分の手足を売りに出していたんだ。
おれたちのぶんどり分を貰うのさ。
敵の天幕に入ったら、いつものことさ。
おれたち、兵隊なんだよ、おれたちもな。
親衛兵たち. そんなこと、われわれのうちでは通用しない.
兵隊でありながら、泥棒のクズ野郎だとは。
我々の皇帝に近づきうるものは、
実直な兵士でなきゃな。
かっぱらい男. 実直だって、そのいみをみんな知ってる、
それはつまり、「徴発」ってこと。
おまえたちもみんな、同じようなものさ。
「よこせ！」、これが同業者のご挨拶よ。

戦争の目的とは、「収奪」なのであろう。勝利者という立場で、敗者に対して合法的に非合理な収奪をすることができる。いかに美辞麗句を並べ立てても、泥棒行為なのである。このことは、洋の東西を問わず、社会的地位の差異もかかわらず、起こっていることだ。官においては、強制的な「徴発」ということになる。ゲーテ自身も西部の戦線やワイマールでそのことを経験している。敗残は悲惨だ、とゲーテは考えていたのではないか。わたしが、ドイツ語で読み切った最初のゲーテの作品が『ヘルマンとドロテア』(Hermann und Doro-

thea) であった。ドロテアの明るさには圧倒されるが、国を追われて避難する民衆にやはり敗残の惨めさが表われている。勝利とか敗北とかに関係なく、ゲーテはおそらく、戦争そのものを嫌っていた、と思える。このあと、親衛兵たちは訳もわからず、身体が動かなくなり、その間に「かっぱらい男」と「ぶんどり女」は金貨を引きずって消えてしまう。そして、皇帝が重臣を連れて登場すると、財宝を守っていた(？)親衛兵たちは退場する。

皇帝は戦争に勝ちはしたが、なにかわだかまりを抱いている。戦いに「ペテン」(Gaukelei) が織り交ざってきたことを認め、その魔法くさい戦術を「偶然」が味方したと弁明する。(S.327) そこに、教会は、つけ込む余地を見つけたのである。論功行賞の場に「大司教兼大宰相」(Der Erzbischof(Erzkanzer)) が姿を見せる。世俗の侯爵たちが退場したのち、大司教として残り、皇帝に、悪魔と結託してその神聖な王冠を得ている、と脅かすのである。それは、神に対して、父なる法王 (Vater Papst) に対して侮蔑であり、法王が知れば、破門され、刑罰に掛けられ、さらに罪深いこの国を滅ぼすだろうと、威嚇する。さて、どうすれば赦されるのであろうか。

ERZBISCHOH. ・・・・・・

Doch schlag an deine Brust und gib vom frevlen Glück
Ein mäßig Scherflein gleich dem Heiligtum zurück:
Den breiten Hügelraum, da, wo dein Zelt gestanden,
Wo böse Geister sich zu deinem Schutz verbanden,
Dem Lügenfürsten du ein horchsam Ohr geliehn,
Den stifte, fromm belehrt, zu heiligem Bemühn;
Mit Berg und dichtem Wald, so weit sie sich erstrecken,
Mit Höhen, die sich grün zu fetter Weide decken,
Fischreichen, klaren Seen, dann Bächlein ohne Zahl,
Wie sie sich, eilig schlängelnd, stürzen ab zu Tal;
Das breite Tal dann selbst, mit Wiesen, Gauen, Gründen:
Die Reue spricht sich aus, und du wirst Gnade finden. (10991-11002, S.331)

大司教. ・・・・・・

だが、あなた様は、自らの胸をたたいて悔やみ、忌まわしい幸運から
ほどよく喜捨としてすぐに教会に返すのです。
あなた様が天幕を立てたあそこの広く連なる丘陵地を、
そこで悪霊どもが、あなた様を守るべく、自ら義務を課し、
その嘘つき侯爵にあなた様が耳をお貸しになったところです。
その地を寄進されて、敬虔な気持ちになられ、神聖な努力をなさいませ。
遠くまで広がっている山や深い森も、

緑の草に覆われている肥沃な牧草地になっている丘も、
魚の多い澄んだ湖も、さらに、せわしなく蛇行しながら
谷へと注ぎ込む無数の小川も。
それから、幅のある広い谷も、草地や肥沃な耕作地、窪地も。
悔恨の念が明らかになって、あなた様は恩寵を得ることになりましょう。

なんという強欲なことか。地域全体をごっそり獲得しようとしている。しかし、これらの広大な地所の寄進だけでは済まなかった。大司教は、悪魔たちが暗躍した戦場を「汚れた土地」(der entweihte Raum) と言って、「神への奉仕」(zum Dienst des Höchstes) のために寺院を建てる計画を、夢を見るがごとくに述べる。言いたいことだけ言って辞去する大司教であるが、出口にさしかかった所から引き返し、さらに「十分の一税」(Zehnten) などの土地にかかわる税金やその他を免除するよう、命じるのである。さらにまた、出口から引き返してきて、「いかがわしい男」(dem sehr verrufnen Mann) であるファウストに与えた土地も教会に与えることを命令する。やはり税金などの免除も含めて。

KAISER verdrießlich.
Das Land ist noch nicht da, im Meere liegt es breit.
ERZBISCHOF.
Wer 's Recht hat und Geduld, für den kommt auch die Zeit.
Für uns mog' Euer Wort in seinen Kräften bleiben!
KAISER allein.
So könnt' ich wohl zunächst das ganze Reich verschreiben. (11039-42, S.332)

皇帝 (不機嫌に).
その土地はまだない、海の中に広がっているだけだ。
大司教.
権利を持ち、忍耐をもっている者に、また時も味方しましょう。
わたくしどもには、あなた様のお言葉が効力として残りますものと。
皇帝 (一人になって).
これじゃおそらく早々に、国全体を譲ることになりかねない。

皇帝は、戦争には勝ったが、大司教から脅かされて、獲得したものも権力もいちじるしく減殺されることになった。皇帝はその地位さえも教会に束縛されている。次になにを要求されるのか、この先を懸念している。また泥沼に入り込んだようである。

他方、ファウストは、まだ海のなかにある土地を、海から奪い取る大事業に取りかかることになる。

(2022・9・20)

ウクライナで「プーチンの戦争」が始まって、7ヶ月ほど経つ。世界第2位の軍事力を持つといわれていたロシアが圧倒するのではないか、と思っていた。だが、大きく様相が違っている。西側諸国の援助を受け、侵攻されたウクライナが押し戻しているのである。この戦争については、ロシアが一方的に責任を負うべき、と考える。1938年に起きたナチスドイツによるズデーテン地方の併合が思い出される。この時、ヒトラーは、ドイツ系住民の保護を名目に、チェコスロバキア全土を占領した。それは翌年の、ポーランド侵攻につながっていった。「プーチンの戦争」も、一方で兄弟国と言いながら、ウクライナ全土の収奪を目的にしたのではなかったのか。ソヴィエト連邦を形成していた国々にはどこにもロシア系住民がいる。カザフスタンなどは、ウクライナ以上にロシア系住民のパーセンテージが上回っている。バルト三国も相当に高い。政策として移住させているのである。トルコやイランも含めて近隣諸国に、今回の戦争は脅威を与えている。

テレビに写る破壊された住居や公共施設などのインフラを、今後どうするのか。多くの、人が死に、一度ロシアに占拠された地域では、ともに暮していた住民同士の間で憎しみあいが起きていると聞く。悲しいことだ。戦争も長引くらしい。戦死者も増えていく。ロシアでは一部の動員が掛けられ、召集令状が送られている。核の使用も「はったり」であってほしい。もう、戦争で勝利を手にする者なんていない。英雄なんているわけがない。

ただ傷ついただけ、ただ傷つくだけ。　(2022・9・21)